

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年4月1日現在

機関番号：10102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23830035

研究課題名（和文） 戦後日本における英米国際関係論の受容

研究課題名（英文） The Reception of Anglo-American IR in Postwar Japan

研究代表者

西村 邦行 (NISHIMURA KUNIYUKI)

北海道教育大学・教育学部・講師

研究者番号：70612274

研究成果の概要（和文）：

戦後の日本の国際政治学は、英米の学説の〈輸入〉に過ぎないとしばしば言われてきた。対して、本研究では、E・H・カー、ハンス・モーゲンソー、ハロルド・ニコルソンという三人の理論家の議論がいかに受容されてきたかを精査することで、〈輸入〉の実態を検討した。結果、日本の知識人たちは近代とどう向き合うかという自身の問題意識を有しており、英米の理論家たちに対する関心はその問題意識に適う限りにおいてのみ維持されていたことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

Scholars have often noted that the field of international studies in postwar Japan is merely a copy (“yu-nyu,” or “import”) of Anglo-American International Relations (IR). Against this background, the present study has investigated the details of this “import” by scrutinizing how Japanese intellectuals read the works of classical Anglo-American theorists such as E. H. Carr, Hans J. Morgenthau, and Harold Nicolson. It proved that at the center of those Japanese intellectuals’ enterprise was the problem of how to face the crisis of modernity: grappling with this issue, they did not idolatry the Anglo-American theories but they employed the insights of Anglo-American international studies only for articulating such concern.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学、国際関係論

キーワード：日本の国際政治学、現実主義、E・H・カー、ハンス・モーゲンソー、ハロルド・ニコルソン

1. 研究開始当初の背景

本研究の着想に至る背景にあったのは、国際関係論における研究の動向と、それに関連した研究代表者自身の研究蓄積とである。

国際関係論が国際社会のあり方を分析する学問であるとして、この四半世紀、その国

際社会は、冷戦の終焉から米国同時多発テロ、そして世界同時不況へと、大きな変動を繰り返してきた。それと並行して、これらの現象を扱う学問としての国際関係論の側も、新しい思考様式の導出を迫られてきた。そうした中、将来を見定める上でも、過去の成功と失

敗に関する理解が必要との観点から、学説史に関する研究が一つ注目を集めてきた。

この潮流に倣差しつつ、申請者は、国際関係論の祖とも言われるイギリスの知識人 E・H・カー (1892~1982) の国際政治思想を研究してきた。そのまとまった成果は、2009 年に米国フロリダ大学政治学部へ提出した博士論文に結実したが、その後日本へ帰国した申請者は、この研究が日本の学界で持つ意義を改めて考える必要に迫られた。そこで、カーを扱った邦語文献を辿り直してみたところ、英米の研究者と日本の研究者とでは、後者の方が彼の思想の複雑性・両義性を的確に捉えており、解釈の在り方がやや異なるのではないかという疑問を持つに至った。

そこで生まれたのが、日本における英米国際関係論の受容を対象とする本研究である。この課題に取り組むことは、国内外の近年の研究動向に沿いつつ、既存研究に新たな知見を加えることに通ずる。上記のように、近年の国際関係論においては、学説史に関する研究が一定の勢いを得ている。他方、この動向は、しばしば、英語圏の学説の相対化と並行する形で推し進められてきた。国際関係論は、主として、第二次世界大戦前のイギリスで開始され、戦後アメリカで進められてきたという事情があるためである。そこで近年、国際関係論においては、非英語圏、とりわけアジアやアフリカといった非西洋圏における理論の発展の経緯に関心が高まってきている (Amitav Acharya and Barry Buzan eds., *Non-Western International Relations Theory: Perspectives on and beyond Asia*, Routledge, 2010 など)。

日本においても、2009 年に日本国際政治学会が叢書『日本の国際政治学』(全四巻)を刊行するなど、自国の学知を振り返る動きが盛んになってきている。とりわけ戦前の思想については、酒井哲哉の研究に代表されるいくつかの画期的な成果が表れてきた (酒井哲哉『近代日本の国際秩序観』岩波書店、2007 年)。しかし、その一方で、戦後に関するまとまった議論は多くない。それどころか、国際関係論がアメリカで一つの分野として確立され始めたこの時期の日本の国際政治学は、しばしば、英語圏の理論の摂取に専心する輸入学問であったと捉えられる (例えば、田中明彦「国際政治理論の再構築」『国際政治』124 号、2000 年、1 頁~10 頁)。この評価が正しいとすれば、現在にまで連なる戦後日本の国際政治学には、振り返るべき独自性などないことになる。

ただ、しかし、日本の国際政治学が輸入学問に過ぎないという主張も、詳細な検討を通じて提示されているわけではない。英米の理論は、戦後日本の文脈へと適合するよう改鑄されながら受容された可能性も考えられて

よい。

2. 研究の目的

以上の背景を受けて、本研究では、日本の国際政治学が戦後に新たな学問として形成されていった際、英米の国際関係論からいかなる影響を受けたかを検討することとした。具体的には、第二次世界大戦前後のイギリスにおいて国際関係論の創出に寄与したカー、彼の主著『危機の二〇年』が刊行された同じ 1939 年に現代外交論の名著『外交』を記したハロルド・ニコルソン (1886-1968)、彼らの活動と並行して、戦後アメリカにおいて国際関係論の基礎を築いたハンス・モーゲンソー (1904-1980) の思想が、日本の知識人によってどのように受容されたのかを解明しようとした。

国際関係論の祖とされるカーには、戦後日本の代表的な論客も、戦時中から関心を寄せていた。例えば、海外の研究者の著作を積極的に翻訳し、戦後の社会科学の発展に目覚ましい貢献を為した清水幾太郎は、戦時中にカーの『危機の二〇年』の続編にあたる『平和の条件』(1942 年)を読み、「非常な衝撃を受け」と後に記している (清水幾太郎「役者あとがき」E・H・カー『新しい社会』岩波新書、1953 年、176 頁)。また、日本政治学会が発足し、戦後政治学の方向性が話し合われた座談会の中では、戦前から有力な研究者であった蠟山政道も、国際政治学の構築に向けた最新の代表的成果として『危機の二〇年』を挙げたが、この時、この発言に呼応した岡義武が、ニコルソンの『外交』を付け加えている (蠟山政道ほか「討論 日本における政治学の過去と将来」『年報政治学』1 号、1950 年、72 頁~73 頁)。同じ頃、アメリカではモーゲンソーが代表作『諸国民間の政治』(1948 年)を著したが、同書はまもなく日本に紹介され、彼の論文も『世界』などの総合雑誌上に順次翻訳されていった。

このように、英米国際関係論の開拓者であった三人の現実主義者は、戦後日本におけるその受容を理解する出発点としてもやはり重要と言える。しかし、現在まで、この論点は、先に挙げた酒井哲哉による散発的な言及などを除くと、独立のテーマとして詳細に扱われてきてはいない。そこで、本研究では、上の清水や蠟山らが、古典的現実主義のいかなる点を積極的に評価したか明らかにすることを目指した。その際、特に、彼ら日本の受容者らの近代観や社会科学観に着目し、草創期英米国際関係論の受容を戦後の日本の知的潮流の中で捉えることを試みた。

こうして三人の代表的な英米の理論家について、その受容過程を解明することは、人文・社会科学のあり方に関連するより大きな目標にもつながる。具体的には、日本の国際

政治学の来歴を明らかにし、さらには、知の越境に関する一つの事例研究を提供する中で、日本の人文社会学一般が持つ意義に光を当てることをも、本研究では一つの主要な目的とした。

3. 研究の方法

日本の国際関係論の成立に英米国際関係論が果たした役割へと注目し、その開拓者とされる古典的現実主義者らの受容を検討する上では、1960年頃までを焦点とした。これは、アメリカにおいて科学的とされる国際関係論の確立が、その頃に起るとい一般的な学説史理解に鑑みてのことである。ただし、研究の中で実際に重要性を持ったのは、それに先立つ時期、具体的には占領期終盤の1950年代前半までである。

具体的には、日本の論客が直接にカー、ニコルソン、モーゲンソーに言及している論稿を中心に、彼らの理解を時系列に沿う形で追っていった。この際、上にも触れた清水や蠟山の他、戦中既にカーの『平和の条件』の書評を記していた矢部貞治や、上にも挙げたようにニコルソンへと注目を向けている岡義武、モーゲンソーの紹介を勢力的に行った幾人かの平和主義者らを特に検討の対象とした。

その際、近代観や社会科学観を中心として、上の各論者が有していた思想的な問題意識全般を幅広く見渡した上で、その中において現実主義的な国際関係論がどのような位置を占めていたかに特に注意を払った。そのために、上の論者らが記した論稿については、カー、ニコルソン、モーゲンソーに直接関わらないものも含めて広くあたると共に、彼ら日本の受容者を扱った後世の二次文献（丸山眞男の著作全集、座談集、対話集、話文集の全て、その師南原繁の回顧録も含めた全集全て、両者とも関係する岡義武の著作全集など）もある程度網羅的に検討した。そうすることによって、彼ら受容者の議論を戦後日本の知的風土の中に定位し、英米現実主義の受容を多様な歴史的文脈の網目の中から理解することを目指した。個別学問史に縛られないこの手法は、現在既にある程度明確な形をとっている国際関係論という学問も、当時は未だ、萌芽を見たばかりの領域であったという歴史認識に鑑みたものである。

また、当時の時代の文脈に関係する二次文献（『思想』や『世界』といった代表的な論壇誌への掲載評論）についても、可能な限り広く渉猟した。戦後1970年ころまでの日本の社会科学に関して、一つ特徴的と言えるのは、各学術分野がそれほど高度に専門化を見せおらず、それゆえに、学術界といわゆる論壇とが現在ほど明確には切り離されていなかった点である（例えば、奥武則『論壇の戦

後史—1945-1970』平凡社、2007年）。実際、多くの総合雑誌誌上に頻りに掲載された各種座談会の記録の中には、三人の現実主義者らの名前や、現実主義理論一般についての言及も見られる。

こうして本研究では、個別学問史を超える方法を二つの道で模索したが、その中での具体的な作業の多くは、申請時の本務校であった京都大学内および大学間の図書館相互利用を通じて行った。さらに現本務校に移った平成24年度には、東京女子大学『丸山眞男文庫』における資料収集も行った。

元々の計画においては、この調査の代わりに、国会図書館で総合雑誌の検索を行う予定であった。しかし、研究の進展に伴って、必要と思われる資料のかなりの部分が京都大学を通じて入手できることが明らかになった。また、より重要なことには、次項でも触れるように、やはり計画の進展に伴って、総合雑誌を完全に網羅するよりは、むしろ受容者個人々人についての精査を行った方が、本研究の目的をよりの確に達成することができると思われてきた。この二つの理由から、平成24年度の資料調査では、特に平成23年度の研究において重要と思われた丸山眞男について、その未公刊史料に焦点を当てた。

4. 研究成果

平成23年度にはまず、国際政治学の祖E・H・カーの著作がどのように読まれたかを検討した。具体的には、戦中から1950年代初頭を焦点に、同時代を生きた研究者の回顧録や当時の学術・総合雑誌の論文・座談会記録・書評などを読み解いた。

現代の国際政治学において、カーは、『危機の二〇年』の著者として知られている。しかし、日本において、彼が最初に注目を浴びたのは、むしろその続編にあたる『平和の条件』を通じてであり、その読者も、社会学者の清水幾太郎や経済学者の都留重人など、政治学外の知識人が主であった。そして、同書中、彼らの関心を喚起したのは、西欧自由民主主義の没落を描き出した前半部であった。カーは、近代西欧の批判者として受容され始めたのである。この点は、次に受容された彼の書が、西欧へのソ連の挑戦を描いた『西欧を衝くソ連』（1946年）であったことから確認できた。

そして、1950年ころから『危機の二〇年』への言及を開始した政治学者たちも、こうした視点からカーを読んでいった。そのことは、日本政治学会会誌『年報政治学』初号に掲載された座談会の記録において窺われるところであり、ここで同書を取り上げた蠟山政道や岡義武といった当時の指導的政治学者たちは、カーを通じて国民国家以後の世界を展望していた。英米で現実主義者と理解されて

いたカーは、日本ではむしろその超克者と捉えられていたものであり、同じ理論家といえども、文脈の違いに応じて、その解釈のされ方は大きく異なっていた。

その上で、平成 24 年度には残るモーゲンソーとニコルソンを、同様の手法から検討した。しかし、開始当初から、資料の不足が問題として立ち現われてくることとなった。具体的に言うと、研究申請時に想定していた以上に、また、我が国における彼らの名声・知名度に反して、二人について取り上げた論稿がほぼ皆無とも言うべき状況であることが明らかになった。

この結果、モーゲンソーとニコルソンについて個別の論稿を記すことは著しく困難であると判明した。ただ、このことはかえって、前年度の知見を裏付ける結果ともなった。というのも、カーに関する検討で明らかになったのは、日本の知識人たちにとって英米の国際関係論が輸入ではなく共鳴の対象だったという点であり、モーゲンソーらに関する資料の少なさは、日本において彼らが偶像的に崇拝されたのではないことの裏返しとも読み取れるからである。

こうした点に鑑みて、前項でも触れたとおり、年度後半はむしろ日本の受容者の側に焦点を当てて研究を進めた。その中で特に丸山眞男の未公開史料にあたった他、関連する同時代の政治学者・知識人らについて、公開資料（主として著作集など）を広く渉猟した。

以上を経て、日本の国際政治学の原点にあった問題意識を探るという主目的は、概ね達成されたと考える。現時点において研究成果として公開されている著書および小文は、いささか副次的な産物であるが、これ以外にも、カーについての論稿は、近日中に公開の予定である（平成 24 年度早々には論文として形になっていたが、同じころ、国内の学術誌において関連テーマについての特集予定が発表されたため、それに合わせて公開を延期した。同特集号への投稿は昨年 10 月に済ませ、要旨を基にした第一次の審査を通過、本年 6 月末に原稿の審査を控えている。仮に掲載不可となった場合、同じ学術誌に独立論文として投稿し、査読を経る予定である）。本研究の背景として記した日本の国際政治学への関心は、本研究開始後も継続して高まりを見せており、いくつかの新たな論稿も現れるに至っている（神谷万丈「日本の現実主義者のナショナリズム観」『国際政治』170 号、2012 年、15 頁～29 頁、土山實男「国際政治理論から見た日本のリアリスト—永井陽之助、高坂正堯、そして若泉敬」『国際政治』172 号、2013 年、114 頁～128 頁など）が、同論文もまた、この流れを後押しするものとして位置づけることができる。

他方、モーゲンソーおよびニコルソンにつ

いては、上記のとおり、具体的な成果には結実していないが、そこからは新たな課題へと連なる多くの知見を得ることができた。一つには、彼らに関する数少ないながらも存在する小論などからは、これまで国際政治学では扱われてこなかった人々へ目を向ける必要がうかがわれた。日本政治思想史の専門家であった先述の丸山などは、その一例である。

他方、特にニコルソンについては、彼自身についての研究を進める糸口をつかむことができた。日本において彼は、『外交』の著者として知られているが、その翻訳が出される以前には、人物論・文芸論に関する若干の翻訳が現れてもいる。実際、彼は、伝記の歴史などについても著作を残しており、研究代表者が過去に検討したカーと同様、文芸と政治のあいだで揺れていた人物であると考えられる。こういった視角からのニコルソンに関する研究は、カーとも関連のあった同時代知識人レナード・ウルフと比較するという形において、平成 25 年度から、若手研究（B）の枠組みで行っていく予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 3 件）

- ① 西村邦行「国際ガバナンスと国際政治史」科研「国際ガバナンスにおける提携形成と制度設計の政治経済分析」研究会（2012 年 11 月 5 日、京都大学）
- ② 西村邦行「日本の国際政治学における理論の〈輸入〉—E・H・カーの初期の受容から」駒場国際政治ワークショップ（2012 年 6 月 7 日、東京大学）
- ③ 西村邦行「戦後における E・H・カーの受容—日本の国際政治学について」日本国際政治学会年次大会（2011 年 11 月 11 日、つくば国際会議場）

〔図書〕（計 1 件）

- ① 西村邦行『国際政治学の誕生—E・H・カーと近代の隘路』（昭和堂、2012 年 3 月）264pp

〔その他〕（計 1 件）

- ① 西村邦行「思想史としての国際政治学史」JAIR Newsletter 131（2012 年 3 月）p. 19

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西村 邦行 (NISHIMURA KUNIYUKI)
北海道教育大学・教育学部・講師
研究者番号：70612274

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし